

注

- ① 君島久子「蜘蛛の女神」『日中文化研究』一九九三 四号 一九〇—一九七
- ② 「黒底干木」「巴丁拉木」「那蹄」については
 嚴汝嫻 宋兆麟 一九八三『永寧納西族的母系制』雲南人民出版社
 楊学政 一九八一「摩梭人和普米族、藏族の女神崇拜」『世界宗教研究』一九八一 四期、一九九一「寧浪県普米族宗教調査」『雲南少数民族社会歴史調査資料匯編 (五)』
 四川省編輯組 一九八七『四川省納西族社会歴史調査』四川省社会科学院出版社を参照した。
- ③ 嚴、宋 一九八三：一三三
- ④ 中国語の「鬼(鬼)」とは死者の魂(幽霊、亡霊)を指し、往々にして生者に害をなすものと考えられている。
- ⑤ 王亜南 鄭海 一九九一『生—死 永恒的誘惑与恐惧』雲南人民出版社：三〇九
- ⑥ 鄧啓耀 一九九三『衣裳上的秘境』三聯書店：五
- ⑦ 王、鄭 一九九一：三〇九
- ⑧ 王、鄭 一九九一：一八
- ⑨ 楊 一九九一：二四二
- ⑩ 烏丙安他編 一九九〇『中国風俗辞典』上海辞書出版：二二六
- ⑪ 鄧 一九九三：九
- ⑫ 鄧 一九九三：九—十一
- ⑬ 嚴、宋 一九八三：一三四—一三五
- ⑭ 楊 一九九二：二三九
- ⑮ 嚴、宋 一九八三：一三五—一三六
- ⑯ 楊 一九九二：二三八
- ⑰ 楊 一九九二：二四一—二四二
- ⑱ 嚴、宋 一九八三：一三六
- ⑲ 王、鄭 一九九一：一五—一六
- ⑳ 嚴、宋 一九八三：一四—一四二
- ㉑ 楊成志 一九八六「關於中国南方若干少数民族的社会歴史簡況和風俗習慣」『民俗学論文選 下』中央民族学院出版社：二五一
- ㉒ 四川省編輯組 一九八七：一一七
- ㉓ 大林太良 一九七九『葬制の起源』角川書店：一一四
- ㉔ 王、鄭 一九九一：六八—六九
- ㉕ 王、鄭 一九九一：六六—六七
- ㉖ 李霖燦 一九八四『永寧摩些族的母系社会』：二六四
- ㉗ 馬学良 一九八九『彝族文化史』上海人民出版社：三八〇

る。老人が吉日を選び、母親か年輩の女性が式を仕切る。招かれる親戚、友人、年長者は女性のみである。式は三つの内容からなる。一、髪型の変更。それまで弁髪にしていたものを、頭の載きで髪を二つに分け、左右に三編みをしてらし、上に頭巾をかぶる。二、衣を変える。スカートと二段のプリーツスカートから三段のプリーツスカートに変える。色を変える。三、銀の耳飾りを付ける。式が終わると宴会が始まり、この時になって初めて男性も参加することができる。

換裙子礼は、女性が成年に達したことを意味し、以後自由恋愛をし、祭の場で相手をさがすことができる。性的関係も、階級や血縁の制限を受けない範囲であれば、慣習法に触れることはない。仮に女性が妊娠しても、男性が償いの礼をするか、または結婚すればよい。しかし、換裙子礼以前の女子は厳しく保護され、仮に結婚外の性的関係が発生すると、相手の男性は慣習法の厳しい懲罰を受け、祖先祭祀に加わることはできない。すなわち、家族の一員と見なされないのである。また、換裙子礼を済ませた女子は、父母兄弟と一緒に宗教儀式に参加する事は出来ず、一人だけ行う。結婚後は夫の家で行う。²⁷

ここで明確になるのは、成年式を挙げる前は男女の交際が厳格に禁止されており、違反すれば慣習法によって罰せられる。しかし、成年式の後であれば、自由に男女の交際を行うことができ、未婚で子ができたとしても、懲罰を受けることはないことである。

永寧納西族の場合も、成年式を終えれば自由に阿注をさがすことができる。とりわけ、現在も阿注婚の行われている地域では、成年式が極めて重要な人生儀礼であり、従って結婚式というセレモニーは存在しないのである。

以上、永寧納西族を中心に誕生と成人の儀礼を見てきたが、その中で最も興味深いことは、生まれたばかりの赤子は、人ではなく「鬼」とみなされており、鬼衣(胞衣)を脱ぎ去ることによって、ようやく「人」になるとされていることである。

成人の儀礼においても、童衣を脱ぎ成人の衣に着替えることによって大人になっていく、という共通する発想をみることが出来る。

こうした考え方については、伝承に現れる蛙息子、魚娘、等が、脱ぎ捨てた皮または衣を隠した男または女と結婚し、しかも、衣を脱ぐことが人間の妻または夫となる契機になっっていることに、共通するものがあるように思える。我々のよく知っている羽衣伝承も、天女が天から舞い降り、衣を隠され男の妻となっている。

以上の如く、伝承に見られる衣を脱ぎ捨てるモチーフは、人間の成年式における衣替えと質を同じくすると考えられ、従って、脱衣が成年式の一つの象徴となっているといえよう。

だが、誰も承知してくれなかった。最後に尋ねた犬は、寿命を交換してもよいが、そのかわり一生養ってほしいと条件をつけた。人は承諾し、六〇歳の寿命を得ることができた。かわりに犬の寿命は一三歳となった。これを知った天神は、「寿命を交換して貰ったお礼として、今後犬をいじめないこと、一杯目の酒は犬に捧げること、良い茶は先ず犬に飲ませること、大晦日の晩、年越しのご馳走は先ず犬に食べさせること」と人に言い聞かせた。以後納西族は新しい年のはじめに一三歳の成年式を行い、必ず犬に餌を与えるようになったのである。^㉕

本来人は一三歳までしか生きられなかったものが、六〇歳まで生きることができるようになった。新しい寿命は犬から譲り受け、神から授かった神聖な歳である。この事の人々の記憶に長く止めておくために、この伝承が語り継がれ、成年式も行われるのである。新しい年のはじめに、満一三歳の男子女子が古い衣服（童衣）を脱いで新しい衣服に着替えるのは、一三歳までで人の寿命を生き終わり、犬に交換してもらった寿命を新たに生き始めることを表しているのである。納西族は一三歳の成年式をもって生命の本当の誕生とみなしていると言えよう。

以上は伝承とのかかわりとしての成年式であるが、成年式本来の意味をいま少し考えてみたい。

(2) 成年と未成年

納西族は、一三歳までは男女の区別なく一様に麻の筒型の衣服を着ている。腰に紐を結んでいるだけで、僅かに髪型で男女の区別がつくのである。一三歳の成年式によって、女子はスカート、男子はズボンを身につけるようになる。

成年式を終えた者とそうでないもの、即ち成人と未成年者とは厳格な区別がなされる。納西族の考えでは未成年者は魂が備わっていないと見なされ、正式な社交の場に出ることは許されない。従って、死後も一族の共同の墓地に葬ることはできない。つまり、一族の正式な構成員としての資格をもっていないのである。成人は、魂が備わっており、仕事に加わることも、正式な社交の場にすることもできる。無論死ねば共同墓地に葬られる。

成年式が終わると、母親みずからが一三歳の娘を土司の館に連れていき、土司に挨拶する。これが自分の娘であると先ず紹介し、既に成人したから、今後家の財産はこの娘が継承し、土司へのさまざまな義務も娘が担当することを報告する。^㉖

成年式を終えた者は正規の労働力であり、かつ義務を履行する役割をも担うのである。

成年と未成年の区別について、彝族の例を挙げる。

彝族の成年式もスカートをはきかえる儀礼「穿裙子礼」であり、通常一五歳から一七歳の間に行われる。幼女から少女へ成長したとみなされた時に行われるので、初潮の後に行う場合もある。奇数年齢の時に行うほうが良いとされ

け豚が置かれている。

中庭で達巴が祖先祭を行い、読経する。次に、叔父が男の子を待機していた部屋から連れてきて、祭壇の前で祖先に叩頭礼をさせる。この時達巴が祖先たちの名前を順に読み上げていき、成年式を行うことを報告し、加護を願う。その後、男の子は母屋に戻り、犬を呼んで食べ物を与える。

次に、男の子は服を脱ぎ、裸で男柱の傍らに立ち、両足で穀物の袋と塩漬け豚を踏みしめ、左手に刀、右手にお金を持つ。足元に穀物と肉を置くのは、生涯食べ物に困らないように、また、刀を持つのは能力のある強い男となるようにとの願いである。達巴が絶えず読経するなかで、叔父が柱から新しい衣服をとり、厳かに男の子に着せる。藍色の上着、ズボンを着せ、黒い帽子をかぶせ終わると、客たちから一斉に祝いの言葉が浴びせられる。友人や年輩者から贈られた品物を祖先の位牌、鍋荘石、竈の神に見せて感謝する。達巴は祖先の系譜を歌い、式の最後に、参会の成人が祝福の歌を歌う。この歌は祝福と今後大人として守らねばならない規範を教える内容である。

以上は男子の成年式の模様であるが、女子の場合も殆んど同じように行われる。ただ違うのは、母親が儀礼を主宰すること。母屋の女柱の傍らで儀式が行われること。女子は右手に腕輪、首飾り、耳飾りを持ち(美の象徴)、左手には麻糸、麻布を持つこと(手先が器用なことを示す)。母親が娘の童装を脱がせ、成人女性用の衣即ち、高い衿の上着、プリーツスカートを着せる。頭は布で巻き、腰には幅広の

刺繍帯を結ぶことなどである。

この儀礼の中で、犬に餌を与えることが重要な要素となっている。納西族には一三歳になったとき、何故犬に對して感謝するのかを物語る次のような伝承がある。

はるか昔、人も獣もようやくこの世に生まれ出たばかりで、雑居しており、生死のことも、守るべき道のこと何も知らなかった。天神アバドはこれでは良くないと判断し、古い年と新しい年を交替させ、そのとき人と獣に寿命を与えることにしようと決め、「何歳と順に寿命を読み上げる。返事をしたものにその寿命を与える事にする」と伝えた。

年の改まるのは真夜中であつた。この時納西族の祖先ツオジルタンは眠りこけていた。天神が「一千歳」と叫んだ時、ツオジルタンは聞きのがし、空を行く雁が返事をした。そこで一千歳は雁の寿命となった。次に天神は百歳と叫んだ。鴨が返事をし、百歳の寿命を手に入れた。天神が六〇歳と叫んだとき、犬が返事をして寿命とした。その後もツオジルタンは眠り続け、天神が一三歳と叫んだ時ようやく朦朧とした眼で起き上がり、返事をした。すっかり目がさめてから、自分の貰った寿命がわずか一三歳と知ると、納得できず、天神に文句を言いに行った。天神は、「もう遅い、寿命はもう分けてしまった。もし長い寿命がほしいなら、動物に交換してもらうしかない」といった。人はたくさん動物を尋ねて寿命を交換してくれないかと頼ん

行う。一つは「掛葬」で、死後木綿の衣と棕櫚の皮でくるみ、竹籠の中に入れて林の中に吊しておく。もう一つは、「土葬」で、筵か杉皮か棕櫚皮で遺体を包み、薄板でつくった箱に入れて土中に埋める。大人と違って、二次葬は行わない。^⑲

四川省俄亜納西族は未成年者の死を非業死とみなし、年齢別に細分化している。乳飲み子の死を「麻窩」^{マウオ}といい、竹籠に入れて山上の岩穴に置く。離乳食の始まった子どもを「滅窩」^{ミエウオ}といい、幼児の死亡は「歇窩」^{シエウオ}という。山で放牧が出来るまでに成長した子の死は「阿魯窩」^{アロウオ}という。通常これらの死者は火葬場ではなく山上で火葬にし、骨は拾わない。既婚の成人でも子どものない男女の死は、正常死と見なされるが、火葬場で火葬にした後、骨は山上の岩穴に置かれる。共同の墓地に入れてもらえないのである^⑳。ちなみに、インドネシアでも産褥死、未成年者の死は「悪い死に方」とみなされるといふ。^㉑

二 成人の儀礼

(1) 衣換えの儀礼

以上は誕生から満月までに、子どもが「鬼」ではなく人間として定着するための儀礼をみてきたが、次に重要な儀礼としては、子どもから大人への成人儀礼がある。西南少数民族の間で行われている成人儀礼をあげてみると、瑶族女子の「牛達」^{ニウダ}、雲南寧蒗小涼山彝族の「換裙礼」^{ホワンチユンリ}、西双版纳布朗族の「報吉礼」^{バオヂリ}、雲南麻栗坡瑶族の「度戒」^{トウヂエ}、西藏

族女子の「戴巴珠礼」^{ダイバチユリ}、普米族の「穿裙子礼」^{チエウチユンツリ}等が挙げられるが、このうち、子どもの衣から大人の衣に着替えることが儀礼の中心となるのは、彝族、普米族とそれに永寧納西族である。特に永寧納西族の「穿裙子」「穿褲子」は古い儀礼を継承しており興味深い。次にその事例を挙げてみる。

永寧納西族の成人儀礼は、女子の場合を「穿裙子」といい、スカートを穿く儀礼の意であり、男子の場合は「穿褲子」といい、ズボンを穿く儀礼の意味である。いずれも必ず満一三歳の正月に行われる。

一九八一年永寧甲布瓦村で行われた男子の成年式の報告によれば、式次第は次の通りである。^㉒

式は母方の叔父が主宰し、成年男性と成人式を行う男子の友人(男)が数人付き添う。家中の庭には卓が二つ用意され、酒、肉、果物等の供物が並べられ祭壇となる。卓の上方の地面には松の枝が三列に挿してあり、枝の傍らには鶏の卵ほどの石が置かれている。松のそばには一メートルほどの白楊樹が立てられ、達巴が供犠した豚の血を白楊樹及び松の傍らの石に塗り付ける。血を塗るのは祖先への敬意であり、白楊樹は祖先が家に帰る時の目印である。用意が整うと、主人は招待客を母屋に案内し、母屋で成年式はじまる。

母屋の囲炉裏のそばに二本の柱がある。左側を男柱といい、右側を女柱という。男子の成年式は男柱の傍らで行い、女子は女柱の傍らで行う。成年式で男子に着せる新たな服は柱の上にかけてあり、柱の下には穀物の入った袋と塩漬

に席を占める。以後産婦も子どももそれまで禁じられていた外部の人と会うことができる。¹⁵⁾

中甸県三壩郷白地納西族では産後産婦の髪洗い儀式を行う。産婦は髪を洗った後、頭に柳帽をかぶり、手に鎌を持ち、子どもを抱いてしばらく太陽の光を浴びさせる。¹⁶⁾

麗江、中甸の納西族は、子の成長を阻害したり、子どもを夭折させる鬼「替羅」がいると信じている。この「鬼」から子を守るため、旧曆の三月、果樹に花がつく頃、巫師（東巴）を呼んでこの鬼を鎮める儀式を行う。永寧では子を脅かす鬼は「亜格」と呼び、無事出産できるよう、巫師（達巴）を呼んで「亜格」を追い払ってもらう。巫師は米の飯で人形を作り「亜格」に見立てる。「亜格」を柄杓の中に入れたのち、柄杓を産婦の右手にもたせ、左手に鎌を持たせる。産婦は怒りをこめて鎌で「亜格」を打ち砕く。四川省木里県の納西族は妊娠後期に入った妊婦が子の為に驅鬼の儀式を行う。永寧とやり方は同じだが、砕いた後の人形を木板に乗せて村外れに運び、鷹に食べさせる。鷹の飛び去った方角によって子の性別がわかるといふ。¹⁷⁾

永寧では子が生まれて一月がたつと、産婦の実家が村中の老人を招き、宴会を開き、感謝する。これを満月酒という。子が長期阿注との間に生まれたのであれば、この宴会は「認子」の礼儀となる。即ち、父である長期阿注を呼び、子と対面させるのである。

満一月まで子は決まった着物もなく、大人の着古した衣で包んであるだけだが、満一月以後、子どもは筒型の着物

を着せられる。新しい布で縫った物ではなく、子沢山の家の老人が着ていた衣を貰い受けて仕立てなおしたものである。これが永寧納西族の子ども時代の唯一の着物である。¹⁸⁾

満月酒の儀礼が済むと、母親は子のもとを離れ野良仕事を再開する。このことから、定まらぬ魂の赤子も、生後一月を経れば彼岸に連れ戻される心配はなくなり、此岸の間として定着すると考えられていることが理解できよう。徳昂族でも納西族同様一月（場合によっては一年）以内の嬰兒は鬼娃娃であり、一月（または一年）過ぎて初めて人になると考えられている。¹⁹⁾

以上、彼岸と此岸の境にいる子の魂をつなぎとめておくための儀礼を些かあげてきた。しかし、仮に儀礼によっても子の魂をつなぎ止めておくことができず、彼岸に連れ戻された場合、つまり、死んだ場合、子はどのように葬られるのであろうか。

彼岸と此岸の境にいる子であれば、死んだ時の葬儀の仕方でも大人の場合とは異なる。死産、嬰兒で死亡した場合、多くの民族がその死を鬼がまとわりついたために起こった正常ならざる死とみなし、葬儀は特殊な形で行われる。永寧納西族の例では、未成年者は魂がないと見なされ、生きている間も共同体の活動の仲間には入れてもらえない。え、死後も、氏族の共同墓地には入ることは許されない。²⁰⁾

瑤族も、五、六歳以下の幼児は大人とは異なった葬儀を

よう、帰りの道を断ち切るために胞衣を埋めたり、焼いたりするのであろう。羽衣伝承で、男が天女の衣を隠し、天女が天にかえる術を失うのと同じ発想ではなからうか。魂の定まらぬ、今にもあの世に逆戻りしそうな赤子をこの世に根付かせるため、さまざまな儀礼が行われる。

雲南永勝県の它谷族（彝族の一支）は子の出生後三日目に子に帽子と服を与える。なぜなら、子は生まれると彼岸の衣である胞衣を失うのであるから、すぐにこの世の衣を着せないと、子の靈魂がこれまでの衣を恋しがって、蟻となつて胞衣に入り込むためであるという。^⑩

また、犬の力を借りて「鬼」封じを行う民族もある。村の入り口に犬の血を塗り付けたり、犬の爪を掛けたりする。それにより、人と鬼との間に越えることのできない一線を引くのである。そうした発想から、嬰兒に「狗衣」（犬の衣）を着せて、陰陽の境、人鬼の間にある嬰兒の魂を人界陽間に固定し、二度と遊離させない例もある。たとえば、雲南鶴慶県彝族の子どもは、出生後最初に着る服は先ず犬に着せ、その後子に着せる。僮僮族では嬰兒の帽子を先ず犬にかぶせる。白族では、誕生七日後、初めて服を着せることを「犬皮の服を着る」という。実際には白い布で出来ている。古い習慣では、この服が出来たのち、先ず犬にかぶせ、その暖気すなわち「狗氣」を吸収させる。これを子に着せれば、犬のように育て易いうえ、鬼邪は犬の臭いを嫌うので、それらをよせつけないという。^⑪

子の魂をこの世に根付かせるための儀礼は、納西族では

次のものがみられる。

永寧納西族では、子が生まれた日または翌日、巫師（達巴）は子に名前を付ける命名式を行う。占いによって名前を決めると、巫師は三度その名を呼ぶ。囲炉裏のそばに座つた子の母が子に代わつて三度返事をする。その後、巫師は子の長命を願つて、子の額に酥油を塗る。家人と友人が子と母に贈り物をする。^⑫

また、虎を貴い物と見なしており、虎年の虎の日に生まれた子は最も貴いとされる。従つて、虎を名前につける子どもが多い。女子の三分の一は「拉木」（雌虎）という名がついている。^⑬

子が生まれて三日目、太陽礼拝を行なう。朝太陽が現れるとすぐ、産婦の母または姉が燃え盛る松明を中庭に投げ入れる。産婦またはその母が左手に赤子を抱き、右手に鎌、麻の茎（矛の見立て）、ラマ経典を持ち、母屋から出て、中庭の中央にしばらく立ち止まる。子どもを太陽の光に当て、太陽の加護を願う。一説によれば、太陽は女性で、天上で最も偉大な存在だという。万物が太陽に依つて存在できると同様、子どもも出生後太陽を礼拝して健やかに育つよう願うのである。産婦の持つ鎌と麻の茎は避邪驅鬼のためであり、子の武器でもある。この日、子の生まれた家では村中の老婆を招き、甜酒、塩漬け肉を振る舞う。同時に産婦は乳房を皆に見せ、健康で乳の多いことを示す。太陽崇拝の儀式が終了すると、産婦と子どもは、それまで住んでいた母屋の奥の部屋から中央の部屋に移り、囲炉裏の右側

(2) 出生と転生

永寧納西族の居住する地域は緯度の高い寒冷地であり、かつては衛生条件が十分でないうえ、性病の流行などにより、妊娠する女性が少なく、嬰兒の死亡率も高かった。

納西族では産婦は「一梅」とよばれる母屋の奥まった一室で分娩する。この部屋は一族の公共の倉庫でもあり、また、家族の誰かが死亡した際、遺体を安置する場所でもある。子の誕生と死者の送りを同じ部屋で行うことから、納西族は生と死を連続したものとしてとらえているということができよう。③

紅河県の哈尼族は人は魂を持っているが、死ぬと、その葬儀の過程で魂は「鬼」に転化し④、葬儀が終わると祖先の居住地に戻っていくといい、滄源県の佤族は、魂が人の体から抜け出したために人は死ぬ。子供が生れるのは、魂が胎内にとりついて再生するのであるという。⑤

また、子供の誕生は別の世界からの転生であり、母胎内は彼岸から此岸への中継地点にすぎない。彼岸から来た赤子は陰陽の両界にまたがった存在で、体は「鬼」と人の間にあり、「鬼」気がまだ残っている。そのため魂がまだしっかりとして体に定着していないから、何かきっかけがあれば簡単に彼岸にもどってしまう。すなわち死亡するという。⑥

紅河県哈尼族は、人は生まれ落ちると同時に一二の「約拉」(魂)をもつ。この魂は人体の禍福にそれぞれ異なった役割を果たす。人の死は魂が体から離れるからおこるのだという。⑦

前述のいくつかの例から、雲南の少数民族にとって、人と鬼、肉体と霊魂は共棲していると考えていることが理解できよう。

(3) 彼岸と此岸の間

赤子は「鬼」であり、彼岸と此岸の境にいるという考え方からすると、赤子を無事育てあげるには、細心の注意が必要ということになる。嬰兒に関するそうした発想を反映したものとして、胞衣に関する儀礼を以下に述べる。

西双版纳の傣族は胞衣を階段の下あるいは道の交差点のところ埋める。おなじく西双版纳の哈尼族は双子を正常ならざることとして忌み嫌う。そのため、子が長くくるまっていた胞衣をも不浄のものと見なし、火中に投じて焼き捨てる。⑧

納西族は胞衣を十字路にある石の下に埋めたり、山の上に埋めたりするが、麗江塔城依隴の納西族は非常に慎重に胞衣を埋める場所を選定する。納西族には子守りの神「巴格」があり、その神のいる場所に胞衣を埋めると神を汚すことになるので、巫師に場所を選んでもらう。⑨

浙江舟山地区の漢族は胞衣を瓶につめて床下に置き、その人が死んだとき棺桶に入れて埋葬するという。⑩

これらの儀礼は、赤子を彼岸と関わりのある胞衣から完全に切り離し、この世にしっかりと移行させるためのものと言えよう。即ち、彼岸の衣である胞衣を脱ぎ捨て、人の世の衣を身にまとった赤子の霊魂が二度と彼岸に帰れない

孫繁栄を祈る。子授けを願う時は、松葉を燃し、穀物を撒きながら、祈りの言葉を述べる。干木の祭の間、恋愛は許されない。禁を犯して女神の不興を買うと、子供に恵まれなくなるといふ。しかし、祭の行き帰りであれば恋愛は自由であり、阿注を捜す最良の機会となっている。

つぎに「巴丁拉木」であるが、巴丁とはカエルを意味し、拉木は母虎、女神を意味する。四川省木里の喇孜山（海拔五〇〇メートル）の洞窟の中に女性の形をした岩があり、それが巴丁拉木である。高さ一・七メートル、長い髪をたらし、豊かな胸をしている。洞窟の入り口は人が一人通れるだけの狭い口であるが、中は百人は入ることができ平地になっている。参拝者は洞の中に湧き出ている泉の水を飲んでから女神に礼拝する。喇孜山は険しい山で、虎や豹、大蛇など危険な動物が出没するため、冬の一時期しか女神に祈りを捧げることは難しい。納西族の巫師の伝えるところによれば、納西族と普米族と西蔵族の巫師が相談し、女神に平地の村に移動してほしいと祈禱したが、女神は移ることを承諾しなかった。その後、南宋年間に、西蔵族が木里の平地に女神の為の廟を建て、女神を招いたが、やはり山から降りてはこなかったという。

巴丁拉木は子授け、子供の成長、女性の美を司るとされ、永寧納西族、普米族、西蔵族に祀られている。美しい女神は、干木女神と同じように、塩源、永定、などにある多くの山の男神たちを阿注にしている。毎年三月に祭が行われ、供物として牛乳、羊乳、清水が捧げられるが、五穀は捧げ

ない。女神は白い衣を着て、白い羊の皮をまとい、白い口バに乗っているといわれている。

また、四川省前所の川の崖に洞穴が二つあるが、この洞穴の中を流れる水は巴丁拉木のいる洞窟から流れ出てきているといわれている。そのため、川の対岸から穴めがけて石を投げ、石がうまく入れば子が授かるとされている。

第三の女神が「那蹄」である。子育て、嬰兒の健康を守る神として信仰されている。乳房が大きく、腹部が豊かな女性の形で表される。祀る時は、達巴（納西族の巫師）が麻の茎で四角い籠を編み、中央に竹を挿す。これが那蹄の家である。中に麦粉で作った女神を入れる。腹部に卵を置いてふくらませ、胸を豊かに作る。さらに麻糸、魚、肉、卵、牛乳等を入れる。板に十六本の刻みをつけ、子供が多いことを表す。達巴は子授けや子の健康を願う祈りを捧げた後、女神の家を木に吊るす。その木は嬰兒の保護神として長い間祀られる。②

以上述べたように、永寧においては他の民族と異なり、創世の女神ではなく、より原初的な女神が子授けの神として崇められている。このことから、創世の女神が永寧で信仰の対象になるより以前、すでに原初的な女神の信仰が存在していたことが考えられる。したがって、永寧、麗江の納西族が共に伝えている創世神話は、麗江で先に作られ、後に永寧に伝播したのではないかと思われる。

西南少数民族の誕生と成人の儀礼

納西族及びその周辺諸民族の事例

新 島

翠

西南少数民族の出生・成年儀式

納西族与其周圍民族の事例

新 島

翠

概 要

人生儀礼は整个民俗礼儀中一个很重要的組成部分。一般説来、人生儀礼包括出生儀式、成年礼、婚礼和葬儀。

人生儀礼的形成和發展、以至變異、都是在特定的社会歴史背景中由多種複雜因素交互作用而促成的。每一種人生儀礼都有特有的和意義。因此在这里介紹以納西族為主的中國西南少数民族の出生・成年儀式的事例、做為研究少数民族儀礼的參考。

一九九三年九月三十日受理

人の一生には誕生、成人、結婚、死などの節目があり、世界の諸民族が何らかの形で人生儀礼を行っているのは周知の通りである。しかしながら、その儀礼の大半はすでに

失われつつあるのが現状である。そこで、比較的伝統の保たれていると思われる西南少数民族、なかでも永寧納西族の事例をとりあげ、子授けから誕生、そして成人までを追いつ、特に興味ある事例を中心に述べてみたい。

一 誕生にまつわる儀礼

(1) 子授けの女神

永寧納西族の周辺諸民族のなかで、子育ての神、子宝を恵む神として女神を崇拝する民族は少なくない。例えば、侗族の「薩大巴」^{サチンバ}、壯族の「姆洛甲」^{ムロジャ}、瑤族の「密洛陀」^{ミロト}、水族の「牙巫」などの女神たちである。これらの女神は単なる子育ての神ではなく、本来天地を創造し、人類をはじめとする万物を創り出した創世の神であった。①

永寧納西族においては、子育て、子宝の神として女神が崇拜されている。しかし、その女神は『創世紀』に登場し、納西族の祖先神として崇められている「柴紅吉吉美」^{チャホンチチメ}ではなく、むしろより原初的な、豊饒を願って祭られる「黒底干木」^{クシム}、「巴丁拉木」^{パティンラム}、「那蹄」^{ナティ}などの女神たちである。これらの女神と子宝を求める儀礼について述べてみたい。

「黒底干木」は、獅子山の女神とも称され、永寧地区を中心に信仰されている女神である。永寧地区では妻訪婚である阿注婚が現在でも行われている。干木女神も多くの男神の阿注をもっていると伝承されている。獅子山の中腹に廟があり、中に鹿に乗った女神が祀られている。毎年七月二五日、人々は獅子山に登り、干木に平安、五穀豊饒、子